

山本宣治の性教育論における性生活調査の位置づけと役割

柴本 枝美*

要約

山本宣治(1889-1929)は、1920年代に同志社大学予科において「人生生物学」と名づけた性教育を実践していた人物である。

山本の性教育論で、科学的知識とは、性生活調査に基づいて一般の人々における現状の性生活を知ることから確立されるものであった。すなわち、山本の性教育論にとって性生活調査は、性教育における知識内容の種類と質を吟味する役割を果たすものであった。したがって、山本の性教育論において性生活調査は必要不可欠な要素であるということが明らかになった。そのうえで、山本は再構築された科学を一般の人々に還元しなければならないと考えていた。その方法の一つが、「人生生物学」講義であった。

このように、山本が従兄弟の安田徳太郎(1898-1983)とともに実施した性生活調査は、「人生生物学」講義の受講生の反応を見るために始めたアンケートがきっかけとなって始められ、そして、その調査から得た結果を「人生生物学」講義を通じて、学生に還元していたといえるだろう。このように、性生活調査と「人生生物学」講義に始まる山本の性教育実践とは、双方向的に関わりあっていたことがわかった。

キーワード： 山本宣治 性教育 性生活調査

2007年10月17日受領(理論)

はじめに

本稿では、山本宣治(1889-1929)と彼の従兄弟である安田徳太郎(1898-1983)とが1920年代に行った性生活調査を分析し、山本の性教育論において性生活調査がどのような役割を果たしていたのかについて検討する。

山本が性教育を実践していた1920年代から1930年代の性教育論の全体的な動向については、田代美江子の研究に詳しい¹。田代は、この時期の性教育論の特質として、以下の3点をあげる。すなわち、①性道徳の注入が重要な役割だととらえられていた点、②性差別的な人間観、弱者の切り捨てにみられるような差別的な人間観を前提とする点、③社会的視点の欠落しているものが多い点である²。

こうした動向と比較すると、山本の性教育論は、きわめて異彩を放つものにとらえられてきた。山本の性

教育論を検討した数多くの先行研究においては、性に関する教訓を生徒に注入するのではなく、科学的な知識を判断材料として提供する立場をとったことが指摘され、その先駆性に対して高い評価がなされている。

たとえば、山本直英は、山本宣治の性教育論から「科学教育・人権教育・自立教育・共生教育」から構成される性教育という理念を導き出したという³。そして、自らの判断で行動することが重視されていたこと、すなわち「性的自己決定能力」の育成がすでにめざされていたという点を高く評価している。小田切明徳もまた、山本の性教育から引き継ぐテーマとして「自知、自敬、自制(自律)」⁴をあげ、その今日的意義を見出している。さらに小田切は、山本が「事実と科学性の解明」⁵を行うため、性生活調査を実施したことに触れている。しかしながら、両者は山本の最初の性教育実践である「人生生物学」講義と性生活調査の関係に

*大阪健康福祉短期大学

柴本枝美

〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

e-mail: e.shibamoto@kenko-fukushi.ac.jp

踏み込んだ考察を行っているわけではない。

また、太田武夫は山本が性教育論を展開していたのとはほぼ同時代に、「日本の現実に立脚した科学的な研究」⁶に貢献したと山本の性生活調査を評価している⁷。しかしながら太田の考察は、あくまでも性科学の観点から限定してなされたものであり、山本の性教育論における性生活調査の位置が検討されていない。そこで、本稿では性生活調査の目的とその結果を検討することを通じて、山本宣治の性教育論における性生活調査の位置づけと役割を分析する。

2. 山本宣治の略歴と時代背景

山本宣治は、1889（明治22）年5月28日、京都に生まれた。両親は敬虔なキリスト教徒であり、山本も生後すぐに四条教会で洗礼を受けている。病弱のため、神戸中学校を一年足らずで退学、両親が山本の養育のために建てた宇治の「花やしき」で、園芸や養鶏、読書をしたりして数年間をすごした。1907（明治40）年、園芸修業のために19歳でカナダのバンクーバーに単身留学し、生活のためさまざまな職業を経験している。とりわけ、スティーブストンでの生活が、山本の思想形成における第一の転機になったとされている⁸。山本は、1911（明治44）年に帰国、同志社大学普通部4年に編入学し、第三高等学校二部、東京帝国大学理科大学動物学科へと進学している。当時、分類学を中心としていた動物学や植物学に進む学生はそう多くはなかった。山本は、分類学としての生物学を実用性がないと批判する一方で、進化論や遺伝学の分野から、「生物学界の革新」を図ろうとした。ここで山本がめざしていた生物学とは、人間の正しい生き方に貢献すべきものであった⁹。

人間の生き方に主眼をおいて研究を進めるこの姿勢は、1920（大正9）年、同志社大学予科で実践することになった自然科学概論の講義を、山本自ら「人生生物学」と名づけたことにも示されている。この講義は、1920（大正9）年から1926（大正15）年まで実施されており、週2時間、1年間で約60時間行われたものである。講義の対象は、同志社大学予科2年生の、政治科、経済科、文科を専門とする学生であり、生物学を専門とする学生ではなかった¹⁰。山本は講義を進めるにあたって、1921（大正10）年9月から学生に印刷代実費で講義資料を配布していた。講義で必要な分を印刷しその都度学生に渡していたようである¹¹。

その後それらの資料を一冊にまとめ、「人生生物学小引」を作成している¹²。

1928（昭和3）年の普通選挙において、山本は無産政党的の代議士として当選する。しかし、1929（昭和4）年に開かれた第56議会において、治安維持法改正案に対して反対を唱えたことで、同案が可決された3月5日東京神田の旅館で凶刃に倒れ、その生涯を終えた。

山本宣治が「人生生物学」講義と名づけた性教育実践を始めた1920年代には、性病蔓延や公娼制度の問題など、性に関する社会問題が顕在化し、性に関する問題に関心が高まるようになってきていた。それにもなって、性に関する知識を一般の人々に普及しようとする傾向が強まった。このように、学問の形式で一般大衆に性について語ることは「通俗的性欲学」と呼ばれ、羽太銳治や澤田順次郎を代表とする「通俗的性学者」たちが登場した¹³。また性に関する雑誌の発刊が相次いだのもこの時代である¹⁴。そして、このような社会状況の中で、子どもたちの性についても注目されるようになり、子どもたちの性をめぐる社会問題への対処法の一つとして、性教育の必要性が主張されるようになっていった。

1920年代に主流であったのは、性欲教育論である。性欲教育論においては、欧米の性科学に基づく科学的な知識を教えることを重視し、結婚や生殖に結びつかない自慰や婚前性交などの害悪を強調することによって、そうした行為そのものを抑制しようとする意図がみられる。たとえば、羽太銳治は性教育を「人間をして、自然的に且つ健全なる性欲生活に入らしめんとするに在つて、最も自然にして正しき性欲生活を、年齢に相当する方法にて実現せしむるに、衛生的且つ倫理的に適へりと認めたる方面に、若き人々を誘導せんとするもの」¹⁵だという。羽太は、性欲の科学研究に基づく「正しき生殖上の知識と、生殖濫用の害」を伝えることによって、「誤つた放縦な性欲生活」に陥ることを防ぐべきだとしたのである。ここで羽太が性欲生活を「正しき」と「誤つた」に二分する基準は、性行為が結婚や生殖に結びつくかどうかという点にあったことも注目しておきたい。

もう一人の性欲教育論者、澤田順次郎の主張をみると、性教育の本旨は「妙齡時代に免れざるオナニー妾行や、特に青年に多く行はるゝ淫行より生ずる、種々の害悪を自覚せしめ、或いは破瓜期時代に、起り易い疾病の予防等、あらゆる性的の非行から脱して高潔

に青少年を教育する」¹⁶ ことにあるとされる。このように、害悪を自覚させることによって、自慰や淫行を予防しようとする背景には、結婚は「性行為の、儀式化したもの」¹⁷ であり、性行為は生殖に結びつくものとして結婚生活においてのみ認められるべきであると澤田が考えていたことがある。

このように、羽太と澤田の主張をみると、性に関する知識を重視しながらも、その方法としては、害悪を強調することによって、「正しき性欲生活」へと誘導しようとする意図がみられる。そして、判断する基準は、性行為が生殖や結婚と結びつくかどうかにあったことがわかる¹⁸。

一方、山本は自らの性教育における目的を次のように示している。すなわち、「個人に該問題の人間の方面を示し、彼及び彼の最愛の者の身边に襲ひ掛る不測の危険を未然に防ぐに足る科学的智識を与へ〔第一段階〕、盲目的本能を制する理性の自律可能性の範囲を示し、以て自知自敬自制を養ひ、凡人として自らに顧みて偽り無く生を楽しみ、更に進んでは同胞に奉仕し得る余力を養ふ〔第二段階〕」¹⁹ ことを目的としていた。山本は、この目的を二つの段階にわけて説明している。

第一段階は、真実を追求させることを目的とし、性に関する科学的な知識を身につけさせるという段階である。人々がそれまで未知の領域であった常態の性に関して科学的な知識を得ることによって、今まで隠蔽されてきた性に対する不必要な恐れが生じなくなるという。これが達成され、ほぼ正しい理解を得たとすると、次に問題となるのは「善と美との『導出』Education」²⁰ であるという。そのうえで、第二段階の目的、すなわち、本能を理性で統制し、人生を楽しむことを示している。

同志社大学予科で実践された「人生生物学」講義においては、ここでいう第一段階の目的、すなわち、性に関する科学的な知識を身につけることを重視していた。第二段階については、「詳細にしてしかも適確且又普遍的な『固形の倫理』や衛生法は実在して居ない」、すなわち、科学的に証明することができる客観的な根拠が存在しないから、山本は「恐ろしくて到底手が出せない」と慎重な判断をしている²¹。ここには、価値判断は個人によって様々であるにもかかわらず、あたかも普遍的な倫理があるように教訓として教えることによって、教える側が正しいと信じる方向へ導くことに対して批判的な山本の姿勢がみてとれる。すな

わち、山本が性教育において重要であると考えていたのは、科学的な知識を判断材料として提供することによって、行動を選択する自由を与えるという点にあったといえよう。

山本は、「人生生物学」講義を進めていくにあたって、自らの講義に対する学生の反応を知るために、初年度の講義が終了した1921（大正10）年春、受講生を対象にアンケート調査を行っている。その回答には、性に関する知識を知ることが望んでいるにもかかわらず、知ることができていないという学生の現状が示されていた²²。ここから山本は、性教育の必要性を確信し、学生の要求をふまえて講義を進めていこうとした。

「人生生物学」講義を実践する中で、山本は、学生の求める知識を伝えるために、日本における性科学を確立する必要があると考えた。そこで、欧米の性科学が現状を把握することに基づいて成立していったことをふまえて、現状を把握することに基づく日本の性科学の確立をめざした。そのために、山本は、「人生生物学」講義の受講生である同志社大学予科、労働学校や自由大学の学生だけではなく、性教育実践と並行して進めていた産児調節運動における講演会の聴講者、あるいは社会科学研究会の学生などを対象として、安田徳太郎とともに性生活調査を実施していくのである。

3. 性生活調査の必要性和その目的

それでは、山本宣治が性生活調査を進めていくにあたって、調査の必要性和その目的をどのように考えていたのかをみていくことにする。

山本宣治の性教育実践は、同志社大学予科で自然科学概論として実践された「人生生物学」講義に始まる。それまで山本は、生物学を専門として研究を進めてきてはいたものの、生殖に関しては無知であり、妻の妊娠に際して初めて妊娠の生理について調べた程度であったという。このことから、たとえ高等教育をうけていたとしても、生殖を中心とした性に関する知識が身につけていないという認識を山本はもっていたのである。とりわけ、常態の性、つまり一般の人々の病的ではない性生活に関しては、ほとんど研究がなされていない状況であった。したがって、山本は生物学者や医者という知識を普及する側の者が、まず自らが無知であるという自覚のうえにたって研究を進める必要があると主張する²³。

また、山本は初年度の「人生生物学」講義で全課程が終了したのち、学生に講義に対する感想を書かせている。その感想から、「生物学を根拠とした純科学的性教育が今日の青年に不可欠」だと山本は痛感したという。そこで山本は、従来取り組んできた「純生物学的研究」の「余業であった性学研究」に尽力せざるをえなくなったと述べている²⁴。すなわち、生物学を研究することが自らの役目だと考えていた山本が性教育への道を本格的に歩んでいく転機となったのは、自らの体験もさることながら、「人生生物学」講義の感想を見て、性教育の必要性を肌で感じ取ったことが大きかったといえる。

ここにおいて山本が進めていこうとした「性学研究」は、欧米の性科学が常態の人間における性の問題を科学的に解明することから始まっていることに示唆を得たものであった。つまり、山本がめざした「性学」とは、日本における常態の性を知ることによって、そこから確立すべき性科学であったといえる。

このような山本の性科学に対する知見は、山本が性的啓蒙運動の中で欧米の性科学を本格的に研究する必要を感じて開催した性学読書会において紹介したドイツのイワン・ブロッホ (Iwan Bloch, 1872-1922) の「性学の使命と其目的」²⁵ からうかがい知ることができる。ブロッホは、生物学の領域でのみ取り扱われがちであった性的異常の研究に、社会科学（特に人類学と人種学）を導入し、性科学 (Sexualwissenschaft) という語を創始した人物であるとされる²⁶。山本の翻訳によればブロッホは、性科学を「性的事項即ち肉体的及び精神的方面に於ける、又個人的及び社会的関係に於ける性の発現の形式及び其作用影響を取扱ふ学問」²⁷ であると定義している。

山本がこの論文を性学読書会の初回に紹介したことは、彼がこの読書会に込めた意図を象徴的に示しているといえよう²⁸。というのは、性学読書会は、生物学だけではなく、学部を越えた共同研究会の体制を築き上げようという意図で設立されたものであり、性科学に関する知識を得るために、生物学だけではなく、性に関連する学問を統合する必要性を山本が感じていたことを見てとれるからである。

さて、再びブロッホの説をみとめることにしよう。ブロッホは「性的生理と病理との多くの現象に明白な説明を与ふる」こと、つまり「広義に於ける性的現象の根底に存する^マ化学的過程を正確に抜目無く記載する

事」を性研究の目的としていた²⁹。山本はここから、変態性欲や性的病理にかたよっていた日本における従来の性科学研究を見直し、常態の性現象に関する研究の必要性を確認したと考えられる。

そこで、山本は、性生活調査の目的について「性教育ニ於テ適切ナル対策ヲ求ムル前提トシテ、正常ナル性生活ノ総合的通覧ヲ試ミヤウトシタ」³⁰と述べている。また、従来の日本の医学研究における「似而非潔癖」や「変態性慾」のみを研究する態度を批判し、「世の大多数の者即ち性に関して病者ならぬ者の状勢を通覧したい」とし、さらには「正常の者の性生活の通則を発見したい」としたのである³¹。すなわち、山本は日本における性科学の確立をめざし、変態性欲ではなく常態の性現象を把握するために、性生活調査を実施しなければならないと考えていたことがみてとれる。このような考えから、山本はブロッホの性科学の定義に基づいて、日本における性科学の推進の目的を次の2点に求めた³²。

- (一) 従来等閑に附せられ秘密の中に葬られて居た正常の性生活の社会的状勢を知る為の統計的通覧の企て
- (二) 日本人の性生活と西洋人のそれとの間に大差ありや、比較検討、西洋人の建設した性学の諸命題の日本人に対して有する妥当性の決定

ここでいう「統計的通覧」のための基礎作業が、性生活調査にあたる。すなわち、山本が、性科学の確立に向けて「現代人の性生活の定量的並びに定性的測定を試みるのが其第一次の着手」³³であると述べていることからわかるように、性生活調査は山本の性科学研究における基盤であった。そして、「具体的資料の数により立証」³⁴されたものが性科学として確立されるべきだと山本は考えていた。そのため、山本の統計的研究は「現代人の性生活全部の鳥瞰図」³⁵となるべきものとして位置づけられ、近親相姦や同性愛など量的には少数の性現象も軽視すべきではないとされた³⁶。山本は、統計的研究によって全体図を示すことができれば、「其常例と変異の分布を一目瞭然たらしむる事に於て、知的特権階級内の変態性慾者及び性的狂信者又は偽善者の独断説を打破し、以て大多数の正常健全なる男女により多くの光をもたらし得る」³⁷と考えていた。つまり、常態と変態の境界を知ること

で、それまで無批判的に信じられてきた性に関する知識による束縛から解き放たれるとしたのである。

また、山本は、このようにして統計調査から得られた知識は、人々にとって有用性が高いと主張する。そして、山本は自らを「研究者兼宣伝者」³⁸と称し、性生活調査の有用性を一般の人々に伝えることによって統計調査への協力をうながし、調査結果から科学的な知識の実証性を高めることを通して科学を再構築することが可能になると考えていた。さらに山本は、性生活調査に基づく「科学的研究の結果の発表を殊更に煩瑣なる表現を以てし少数の炯眼の識者の看破する所のみ委ねるのは決して科学研究の本意ではない」³⁹とし、性科学の成果を一般の人々に普及させることをめざした。ここには、二つの意味での普及の意義がある。すなわち、①一般の人々に科学の有用性を普及させることによって、調査に対する多くの協力が得られるようになるということ、②調査の結果得た知識に基づいて再構築した科学を一般の人々に還元していくことである。以上のように普及について山本は考えていた。

一般の人々に対する還元の試みとして、山本が最初に発表する場を与えられたのは、1923（大正12）年10月、京都医師会の例会においてであった。そこで山本は、「日本人男学生ノ統計的調査」の結果を発表している。さらに、雑誌『生理学研究』において「若い男の性生活」の調査結果を提供しようとした。しかしながら、永井潜（1876-1957）から圧力が加わり、連載の第8回をもって中断を余儀なくされる。

永井は、当時、東京帝国大学医学部生理学教室の教授であったが、性に関する啓蒙活動を行っていた点では山本と共通している。筑波常治によれば⁴⁰、山本も永井も、ともに自然科学史に興味をもち、他方面な啓蒙活動を実施していたという点では共通しているという。しかしながら、筑波があげている両者の違いを検討してみると、決定的な違いは、両者の科学観にあると考えられる。すなわち、永井においては、科学は一部の知識人階級の特権として存在すればよいとして、知識人階級を優性形質ととらえ、その存続をはかろうと意図していたと考えられる。一方、山本は真実を追究することによって得られる科学は、実用性があり、一般の人々に普及されてこそ意味があるものだと考えていた。山本は、あくまでも、民衆が知りたいと思っている性に関する知識を教えなければならないという使命を感じていたことがうかがえる。

以上みてきたように、山本は、常態の性に対して無知であることから生じる弊害を防ぐためには、まず、伝える側に立つ山本が常態の性に関する知識を身につける必要があると考えていたことがわかった。そのために、性生活調査を実施しようとしたのであった。さらに、その統計結果を一般の人々にとって実用性のある性科学へと再構築し、さらにその性科学の知識を普及させ、還元させていかねばならないと考えていたことが明らかとなった。

4. 性生活調査の内容とその分析

本節では、性生活調査の調査内容について詳細に検討し、山本の性生活調査が、山本の性教育論においてどのような役割を担っていたのかを明らかにする。

(1) 講義に対する反応をみる

山本は安田とともに、1922（大正11）年から1928（昭和3）年までの7年間にわたって、性生活調査を行った。調査対象は、主に山本の講義や講演会の受講者であり、総数は最終的に1182人に及ぶ⁴¹。ただし、そのうち、女性の回答はわずか20人にすぎなかった。当時、このような性生活に関する調査は、欧米においても、また日本においても実施されてはいたものの、それらは医師による患者を対象とした調査や調査対象者数が少ないものであった⁴²。したがって、当時、山本と安田が行った性生活調査は、患者ではなく一般の人々を対象としていた点、また当時としては多数の1182人の統計調査であったという点で意義あるものであったといえる。1924年までの調査対象者は表7の通りであった。

山本は、性生活調査の第一回目として、1921（大正10）年3月、同志社大学予科で開講していた「人生生物学」の受講生140名に、講義に対する感想を求めている。そして、同年7月、試験終了後に余力のある者に対してアンケート調査を行っている。そこでは、①山本の講義によって実生活に及ぼした影響、②聴講中に感じた性的興奮の有無、③講義という形式を用いて性について知ることに対する是非などをたずねている⁴³。この調査では、134名中131名の回答が得られた。

当初この調査の目的は、山本自身がこの講義に対する反応を知るためであったと考えられる。しかしながら、前節で述べたように、山本は学生の感想を読む中で、常態の性に関して無知であるという学生の実態を知り、性教育の必要性を認識していくようになる。そ

してこのアンケート調査をもとに、山本は本格的な性生活調査の調査用紙を作成していくのである。すなわち、アンケート調査は、山本が性科学研究に没頭する契機となり、そして、調査用紙作成のための予備調査という役割を担うことになった。

(2) 性科学の確立に向けて

調査用紙は、型 A、型 B、型 C の 3 種類用意された。型 A (文末資料 I -1 参照) はおもに山本の講演についての調査であり、型 B は性欲、夢精、自慰、性交についての調査である (文末資料 I -2 参照)。型 C は、実行している避妊法についての調査であるが、ほとんど回収できなかったようである⁴⁴。山本がおもに分析対象として用いていたのは型 B である。ここでは、型 B の調査用紙に提示されている項目に即して調査内容をみていくことにする。

型 B の調査項目は、大別して、性欲、夢精、自慰、性交の 4 項目からなる。これらの項目について、経験の有無、はじめて生じた年齢、季節、その要因などをたずねている。そのほか、調査用紙では、回答者の年齢、未婚か既婚か、子どもの有無、兄弟構成の記入、そしてこの調査用紙に回答した感想を記述するよう求めている。調査対象者は、ほとんどが学生であり、「若い男の性生活」を発表した当時での分析では、未婚者が 7 割で、年齢は 22 歳前後が多かった (図 1、図 2 参照)。

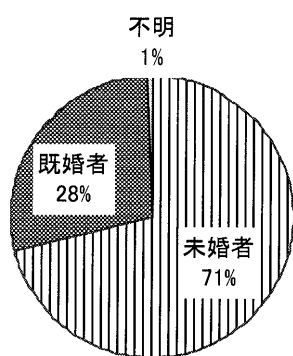


図 1 調査対象者 (A3,M,N,O,P,Q) の身分分類 (総数 159)

出典:「若い男の性生活」第三表 (『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979 年、223 頁) に基づき筆者作成、パーセンテージは筆者が再計算したもの。

これらの調査項目の中で、とくに注目されるのは自慰に対する問いである。そこでは、経験の有無、年齢、季節、要因、いつどういふ方法で行うか、自慰の継続期間、その回数などを問うたうえで、自慰に対する否定的な見解と、それに対する自慰経験者の意見をたず

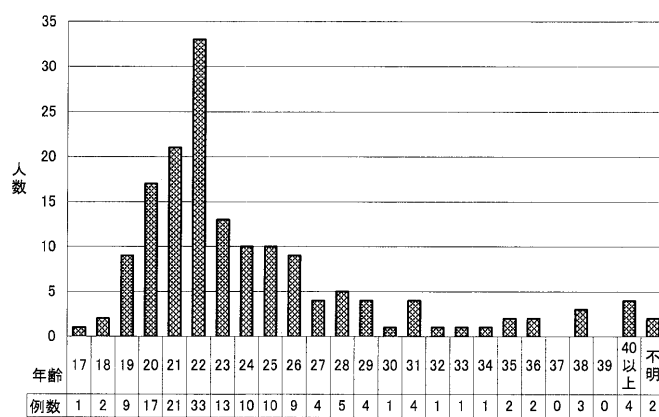
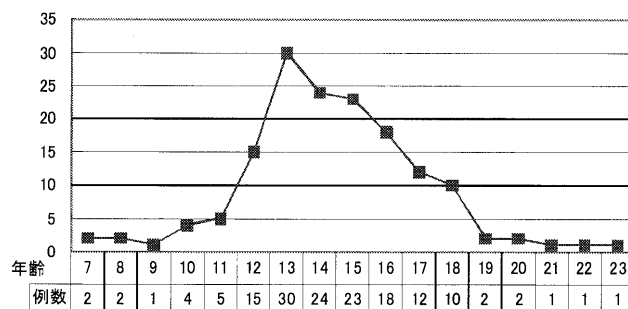


図 2 調査対象者 (A3,M,N,O,P,Q) の年齢別人数 (総数 159)

出典:「若い男の性生活」第四表 (『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979 年、223 頁) に基づき筆者作成。

ねている。これらの項目に対する回答をみてみると、回答者が自慰によって生じると信じている害悪は、成長異常、「低脳白痴」、近眼、性病など多数あげられている⁴⁵。しかし一方で、自慰経験者は 163 名中 159 名 (96.9%)⁴⁶ と、ほぼ 100% に近い数字を示している (図 3、図 4 参照)。



回答あり			回答なし	総数
経験者		未経験者		
初発期自覚	初発期忘却			
153	6	5	0	164

図 3 自慰初発者数 (1923 年 10 月、第一回報告による)

出典:山本原図 (1923 年 7 月)「現代の両性問題」第六図 (『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979 年、346 頁) に基づき筆者作成。

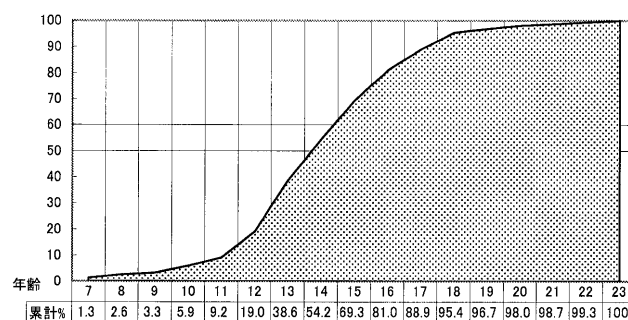


図 4 自慰経験者数増加表

出典:山本原図 (1923 年 7 月)「現代の両性問題」第七図 (『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979 年、346 頁) に基づき筆者作成。

表 1 調査対象者一覧表

時			配布場所	数			対象		摘要
年	月	日		配布	記入 還送	利用率	職業	年齢	
1922	3		京都同志社大学予科二年生		68		学生	青年	60 時間「人生生物学」講義の後
1923	3	17	京都同志社大学予科二年生		65		学生	青年	60 時間「人生生物学」講義の後
1924	3	14	京都同志社大学予科二年生	170	79		学生	青年	60 時間「人生生物学」講義の後
1925	3		京都同志社大学予科二年生		59		学生	青年	
1926	3		京都同志社大学予科二年生		52		学生	青年	
1923	3	1	京都府立医科大学予科生	100	34	34.0%	学生	青年	理学士東光治氏説明の後配布
1922	3		京大助手正垣清氏紹介		22		主として神戸川崎造船所内	混合	工場労働者
1922	6	1	京大学生 山田種三郎氏紹介	30	4		学生以外	主として青年	堺市出身者
1923	2	3	京大学生 山田種三郎氏紹介	30	5		学生以外	主として青年	堺市出身者
1922	4		三重県 服部栄治郎氏紹介		15		雑	混合	伊賀地方の在住者
1922	6	1	神戸 山中平治氏紹介	100	7	7.0%	会社員	青年	
1922	6		京大理学部動物学教室関係者		4		学生	青年	
1922	3	25	京都府宇治町同攻会	56	32	57.1%	学生又は元学生	青年 壮年	性教育 2 時間講義聴講者
1922	9		東大学生 吉田九郎氏紹介		4		雑	混合	
1922			筆者の友人		4		雑	青年	
1923	3	22	高知市 性教育講習会	60	16	26.6%	主として教育者	混合	性教育四講聴講者
1923	8	3	京大夏期講習会「性教育論」	130	31	23.8%	主として教育者	混合	10 時間聴講者
1924	10		京都帝国大学社会科学研究所		41				
1923	8	10	新潟県魚沼自由大学	90	22	24.4%	農村の有識階級	主として青年	8 時間聴講者
1924	1	12	長野県飯田町信南自由大学	60	17		農村の有識階級	主として青年	10 時間聴講者
1923	8		科学画報 8 月号読者	11	9		雑誌読者	主として青年	著者の遺精に関する文を読んだ人
1924	2	6	日本労働総同盟大阪労働学校	60	10		工場労働者	主として青年	「労農大学」の 10 時間聴講者
1924	5	30	東京帝大社会科学研究会	400	145	35.5%	帝大生	青年	8 時間講演の後
1924	6	4	早稲田大学社会科学研究会	400	180	45.2%	早大生	青年	6 時間講演の後
1924	8	6	沼津市民衆夏期大学	45			有識階級	主として青年	3 時間講演の後
1924	8	7	東京建設者同盟夏期講演会	110			有識階級	主として青年	3 時間講演の後

出典：「若い男の性生活」『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979 年、218-219 頁(第一表)、260-261 頁(第十表)を中心にし、渋谷知美『日本の童貞』文芸新書、2003 年、50-51 頁を参照して筆者がまとめた。

この結果から山本は「一時的被害を生ずるのみだとしても、寧ろ大害ありと誇張して迄も青年を脅かし、以て彼等の貞潔を維持しやうと試みた今迄の多くの中学倫理教師の無知からきた親切は、却つて青年を苦しめ乍らしかも其行為を断念させる力も無く、唯々神経病特効薬や滋強剤の売行きを盛んならしめる丈であつた」⁴⁷と述べている。すなわち、山本は害悪をいくら強調したとしても、行為を防ぐだけの効果はないという実態をみてとったのである。

山本はつづけて、自慰経験者が96.9%であるという結果は日本特有の現象ではないということを、欧米諸国(独、墺、英、米)における調査結果を引用することで証明している。そして、自慰によって「心的作業能率が一時低下することは事実」であるとしながらも、「永久的大害」を引き起こすことはないとする⁴⁸。そのうえで、むしろ抑圧された性衝動を解放する方法として、自慰や遺精を肯定的に位置づけている。

以上のように、山本は、日本における人々の常態の性を知るために性生活調査を進めていく中で、従来の性欲教育論において主流となっていた、害悪を強調して予防しようとする方法が、有効性が低いことを実証した。このように、山本は、統計的調査の結果に基づいて、欧米から移入した科学を日本の現状に即した形で再構築しようと試みた。この点において、羽太や澤田の性欲教育論における科学のとらえ方とは異なる。そこには、欧米から科学を移入することに満足せず、日本の性生活調査を実施することによって、実証的に再構築すべきだという山本の科学観が如実に反映されているといえる。

このように、科学的知識を伝えることを重視する山本の性欲教育論において、科学的知識とは、山本の科学観からすれば、性生活調査に基づいて一般の人々における現状の性生活を知ることから確立されるものであった。すなわち、山本の性欲教育論にとって、性生活調査は、その知識内容の種類と質を吟味する役割を果たすものであった。したがって、山本の性欲教育論において性生活調査は必要不可欠な要素であるということが明らかになった。そのうえで、山本は再構築された科学を一般の人々に還元しなければならないと考えていた。その方法の一つが、「人生生物学」講義であった。

おわりに

以上みてきたように、山本が安田とともに実施した

性生活調査は、「人生生物学」講義の受講生の反応を見るために始めたアンケートがきっかけとなって開始された。そして、その調査から得た結果を「人生生物学」講義を通じて、学生に還元していたといえる。また、山本にとって性生活調査の結果は、青年男子の性に関する悩みを知り、その悩みを解決するべく、性科学研究へと没頭していく契機になったと考えられる。そして、学生たちは悩みを解決する糸口を「人生生物学」講義を通じて得たからこそ、積極的に調査に協力していたといえるのではないだろうか。このことは、表1に示されているように、山本の講義を短時間でも受講した人と、ただ配布された人との調査用紙の回収率に差がみられることにもあらわれている。こうしてみると、「人生生物学」講義に始まる性教育実践は、性生活調査に対する協力者を得るうえでも重要な役割を果たしていたといえる。

このように、性生活調査と「人生生物学」講義に始まる山本の性教育実践とは、双方向的に関わりあっていたことがわかった。その循環の中で性生活調査の結果に基づいて、講義がどのように進められていたのか、今後さらに検討を進めていきたい。

(しばもと えみ 本学講師)

【注】

- 1 田代美江子、1992「近代日本における性教育論の展開とその特質—1920-30年代前半を中心に—」『人間研究』第28号、pp.63-85、1996「教育雑誌における性教育論の展開—1920から30年代を中心に—」『日本女子大学人間社会研究紀要』第2号、pp.1-11、2002「性差と教育—近代日本の性教育論にみられる男女の関係性—」『歴史学研究』第765号、pp.15-24などがあげられる。
- 2 田代美江子、1992「近代日本における性教育論の展開とその特質—1920-30年代前半を中心に—」『人間研究』第28号、pp.80-81。
- 3 山本直英、1999『山本宣治の性教育論』p.83、明石書店。
- 4 小田切明德、1996「山宣の性教育」『山宣研究』第15号、p.25。

- 5 小田切明徳、1999「これからの性教育と『山宣性学』の遺産」『性と生の教育』第21号、p.26。
- 6 太田武夫、1937『性科学』三笠書房（2002『性と生殖の人権問題資料集成』第34巻、63頁、不二出版に再掲）。
- 7 性生活調査については、渋谷知美が「大規模なセックス・リサーチ」とし、その調査にみられる学生の回答から、当時の童貞に対する意識について分析している（渋谷知美、2003『日本の童貞』p.20、文春新書）。
- 8 佐々木敏二、1970「山本宣治研究（2）—生物学研究と『人生生物学』—」『キリスト教社会問題研究』第16・17号、p.144。
- 9 佐々木敏二、1998『山本宣治 上』pp.238-245、不二出版（以下、この文献は『山本宣治 上』と示す）。
- 10 山本宣治、1923『性教育』内外出版（山本宣治著、佐々木敏二・小田切明徳編、1979『山本宣治全集 第二巻 性教育』p.200、汐文社、以下この文献は『性教育』と記す）。
- 11 山本宣治「人生生物学小引」初版（1921年4月）-6版（1925年4月）（山本宣治著、佐々木敏二・小田切明徳編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』p.79、汐文社、以下この文献は「人生生物学小引」と記す）。同志社大学人文科学研究所第一研究（キリスト教社会問題研究会）編、1969『山本宣治関係資料目録 下』（p.1）に示されている「人生生物学講義大要」は、講義資料第1から第5の途中まで、自慰に悩む青年に答ふから第116の途中まで、第117から第128の途中まで、第128の途中から第135の途中までの4種類が現存している。これらは、それぞれホチキス止めされており、数冊ずつ現存することから、講義資料としてその都度学生に配布したのではないかと推測される。
- 12 「人生生物学小引」は、1921（大正10）年4月の初版発行の際には「人生生物学入門・性教育私見」という名称であったが、後に「人生生物学小引」に改題されている。同志社大学人文科学研究所第一研究（キリスト教社会問題研究会）編、1968『山本宣治関係資料目録 上』（p.23）をみると、第3版からの名称変更ではないかと推測される。ここでは、『山本宣治全集』（全8巻、汐文社、1979年）の表記に準じ、「人生生物学小引」と記す。
- 13 古川誠、1993「恋愛と性欲の第三帝国」『現代思想』Vol.27-07、pp.116-118。
- 14 1920年には羽太鋭治が『性欲と人生』を、澤田順次郎が『性』を創刊している。また、1917年には中村古峽による『変態心理』が、1922年には田中香涯による『変態性欲』が出版された。このほか、同時期に発刊された雑誌は、『相對』（小倉清三郎主幹、1913年創刊）『性之研究』（北野博美主幹、1919年創刊）『産児調節評論』（山本宣治主幹、1925年創刊）などがあげられる（小田亮、1996『性』pp.54-55、三省堂）。
- 15 羽太鋭治、1927『家庭・学校 資料と実際 性教育の研究』文書堂、序文（1990『性教育研究基本文献集』第9巻、大空社）。
- 16 澤田順次郎、1928『性的本能享樂の真相』pp.52-53、南海書院。
- 17 同上書、p.121。
- 18 当時の性教育論については、柴本枝美、2005「1920年代における性教育論の目的規定について—山本宣治の性教育論を中心に—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号、pp.290-301も参照されたい。
- 19 「人生生物学小引」pp.59-60。
- 20 『性教育』p.247。
- 21 同上書、pp.245-247。
- 22 同上書、pp.205-218。
- 23 同上書、pp.167-171。
- 24 山本宣治、1924年4月-1925年2月「若い男の性生活」『生理学研究』第1巻第3号-第2巻第2号、山本宣治著、佐々木敏二・小田切明徳編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、p.208（以下、この論文は「若い男の性生活」と示す）。
- 25 原著：Iwan Bloch(1914)“Aufgaben und Ziele der Sexualwissenschaft” “Zeitschrift für Sexualwissenschaft.” Bd.I.（山本宣治著、佐々木敏二・小田切明徳編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社に所収）。
- 26 Johyn Money, Herman Musaph 編集、広井正彦他監訳、1985『性学大事典』p.25、西村書店。
- 27 イワン・ブロッホ著、山本宣治訳、1924年2-3月「性学の使命と其目的」『生理学研究』第1-2号、山本宣治著、佐々木敏二・小田切明徳編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』p.198、汐文社（以下、この論文は「性学の使命と其目的」と示す）。
- 28 性学読書会の設立趣旨、構成、題目など主な記録については、『山本宣治 上』（pp.270-279）を参照され

- たい。
- 29 「性学の使命と其目的」 p.200。
- 30 山本宣治、1923年10月24日「日本人男学生ノ性生活ノ統計的調査」京都医師会十月例会発表山本宣治著、佐々木敏二・小田切明德編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、p.190。
- 31 「若い男の性生活」 p.209。
- 32 同上論文、pp.210-211。
- 33 同上論文、p.269。
- 34 同上論文、p.270。
- 35 同上論文、p.272。
- 36 同上論文、pp.274-275。
- 37 同上論文、p.282。
- 38 同上論文、p.264。
- 39 同上論文、p.283。
- 40 筑波常治、1966「山本宣治と永井潜」『文藝春秋』第44巻第1号、pp.308-314。
- 41 安田によれば、「東大143人、早大236人、京大93人、同大268人、京都府立医大34人、京阪神、東京、信州、新潟、沼津、仙台、高知、熊本等の一部インテリ層および各都市の労働学校および神戸川崎造船所の工場労働者あわせて349人の男と、それらのなかにわずかに散在する17人の女を加えて、計1140人」だとされるが（安田徳太郎、1950『性科学の基礎知識』世界評論社、『性と生殖の人権問題資料集成 第34巻』不二出版、2002に所収、p.350）、小田切の調べによれば1182名、うち女性は20名であるとされる（「若い男の性生活」編註、p.289）。本稿では、小田切の集計結果を採用している。
- 42 山本は、自慰に関する調査として、マグヌス・ヒルシュフェルド（Magnus Hirschfeld,1868-1935,ドイツ）が1917年に発表した437例、遺精・自慰・性交に関する調査として、広瀬海軍中佐が1923年に発表した約500例の調査をあげている（「若い男の性生活」p.260）。そのほかにも、大澤謙二、1924年9月「性学に関する統計」『生理学研究』第1巻第8号、pp.1-10、羽太が紹介している日本における調査、大野豊太による自慰・性交の調査などがある（羽太鋭治・伊藤尚賢、1921『如何に性欲に就いて教ふべきか 父と子の性欲問答』新橋堂、1990『性教育研究基本文献集』第2巻、大空社に所収）。
- 43 『性教育』 p.206。
- 44 宇治の山本宣治資料室にも1通しか残されていない（「若い男の性生活」編註、p.289）。
- 45 山本宣治、1927「性と人生統計」『最新科学講座 第12巻』山本宣治著、佐々木敏二・小田切明德編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、p.504（以下、この論文は「性と人生統計」と示す）。
- 46 第一回統計調査（1923年10月）による統計（「性と人生統計」p.503）。
- 47 山本宣治、1927「現代の両性問題」『アルス文化講座』山本宣治著、佐々木敏二・小田切明德編、1979『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、p.348。
- 48 「性と人生統計」 pp.503-505。

「光を！ 今少しの光を！」 GOETHE
真理の為、自由の為

我々は先づ自己に眼覚めて、事実を集めねばならぬ、そしてその上に将来の文化が建設される。「あんパン」と「人力車」とを世界文化に対する唯一の貢献として居た我国から、他に何者をも産むことは出来ないか、それは唯将来のみが語り得る。若き友よ、新しい文化の建設の為協力援助を仰ぎたい。

京都大学理学部 山本宣治
動物学教室にて

人生生物学研究の為にかく記入を乞うた用紙は予の研究室に保存して置く、特に個人的内情に関する告白をそれと他に悟られる様な形式で発表しない事を明らかに誓うて置く。無論姓名記入迄御願ひしようといふのでは無い、唯誇張無く虚飾無しに卒直に事実を書いていたゞきたい。変態や常態はまだ区別するまでにわかつて居ない、願はくは他に気がねせず、すべて唯ありのままに…。

1から9までは応答者の思想的背景と環境を推測したい為に設けた、迷惑と思ふ方は無論書かないで宜しい。

1、生年月

2、出生地

3、之迄の生活の
大部分を過した 出身地

4、出身学校

5、父兄の職業

6、自己の職業

7、8の二項は、新マルサス主義の研究と関係あり、又民衆衛生の実状を知りたい為に設けた記入様式の例、現存し自分より三歳年長の兄ならば男 $+$ 3、既に死んだ二年若い妹ならば女 $-$ 2等。子供の方は当年何歳、例、男八歳。

7、兄弟姉妹の数、年齢の差、性

8、子供の年齢、性

9、宗教上の信仰と思想上の傾向

10、此講義が応答者の実生活と思想に与へた悪影響の将来

11、此講義が応答者の実生活と思想に与へた良影響の将来

12、此講義最中に性的興奮(例へば心的動揺、勃起、不随意射精等)があつたか。「あり」「なし」あつたらば如何なる点に於て

13、此講義の中で事実上の誤り又は見解として偏見だと考へ、応答者が首肯しない点

14、更に聞きたいこと

15、此講義で啓発された点、従来抱いて居た性智識の迷信と誤謬、それ等は人から聞いたのか、医師から教はつたのか、本で読んだのか

16、将来「山本人生生物学」が公刊された時それを各自に読むに任せ、そして斯やうな性教育講義を多数者の前に口演するのを見合はせるべきものであらうか(一般に、良書があるならば教室で性教育講義は有害無益であるか)。智識階級に対して、一般人に対して

17、その他の感想と希望、要求

人生生物学研究資料

「光を！ 今少しの光を」 GOETHE

医学は生物の健的研究と病的研究の提携を俟つて完璧するものであります。しかも従来やゝもすれば世人は病理の攻究をもつて医学の使命としました。学者は仮佯的潔癖をもつて性的心理の闡明を躊躇し、健康体の性的現象に触れるを避けました。かゝる種の常識を青年に授くるを冒瀆とし、吾人青年をして徒らに杞憂と煩悶のうちに陥れました。しかしつひに新しき科学の黎明が来ました。青年の建設すべき文化の烽火が上りました。吾人は誤つたドグマを憎んで性的啓蒙を叫ばねばなりません。吾人はあらゆる虚偽と威嚇から解放されて、新しき倫理を建てねばなりません。

デルポエーフ曰く、「すべての心理学者は彼の短所の告白さへ敢へてせなければならぬ、若しそれにより暗き問題に光を投ずと信ぜば」。

然り。もし真実をお愛しになるなら、もし来るべき人類の幸福をお計りになるなら、さらにまたかゝる研究にすべてを捧げんとする吾人の智的熱愛をお認めになるなら、尊きあなたがたの御経験より、左の諸点につき御教示を仰がんことを切望いたします。

京都帝国大学医学部

安田 徳太郎

「汝自身を知れ」。我々は自分自身を勇敢に直視して得た実相に基づいて、対策を講じなければならぬ。私は前記安田氏の企てに力を合せて純正生物学の方面から進んで行く者である。私の話を聞いて此立場を理解した諸兄姉にお願いして次の諸項の記入を乞うてみる。勿論記名は無用、記録一切は予の研究室に保存して秘密を守る。誇張無く虚飾無く唯真実を書き入れてほしい。常態変態を区別する程にまだわかつて居ない。願はくは他に気がねせず、すべて唯ありのままに……。

京都帝国大学大津臨湖実験所にて

理学士 山本 宣治

以下の問に対する答に当る語は右に黒丸を付けてあるが、あなたの答えに相当する句がある場合はそれだけを残し他を消してください。順々に書き下す前に、問全体に一通り眼を通して戴く方が便利である。我々は事実を求めて居る、即ち「……である」点を聞きたい、「……と思ふ」点は唯思ふ丈でなく、其思ふ理由を挙げてほしい。

あなた自身のおひたちや其他

- (1) うまれた年月、性、結婚

明治 年 月生。 男、女。 未婚、既婚。

子供あり、なし。 男 人、 女 人。

兄 人、姉 人 (歳自分より年上) 現存又は死亡

弟 人、妹 人 (歳自分より年下) 現存又は死亡

夢 精

- (2) 夢精（睡眠中に精液をもらす事）の経験があるか

なし あり

経験のある方だけ次の問に応じて戴きたい

- A 最初夢精のあつたのはいつか

満 十 年 月

又は数 年 十 歳の春 夏 秋 冬

又は 明治 年 月

- B 夢精が起るのに多少共規則正しい順序や度数がほゞきまつて居るか

周期。 規則正し、 不規則

度数。 を隔て、年に 回 又は月に 回

C 最も頻繁に起るのは或季節又は或月又は週の或日に限られて居るか
限られて居る 否

春 夏 秋 冬 月

週の 曜日 宵 深夜 暁

D 起る前の気分と健康状態に関する何かの特徴（一般に云うて見て）

E 起った翌日の気分と健康状態に関する特徴（一般に云うて見て）

F 夢精に伴ふ夢の色々の種類

(3) あせる時とか、驚いた時とかに、不随意射精（思はず精液をもらす事）の経験があるか
例、試験場で難問に会した時とか、発車間際の汽車にかけつけようとする時とか

なし あり

あつたならば、どんな時に？

自 慰

(4) 自慰を行うた経験があるか。 なし あり

ある方だけ次の間に答へて戴きたい

A 最初其れを経験した時の年齢

満 年 ヶ月

又は数、年 歳の春 夏 秋 冬

B 其折の誘因

人に聞いたのか？ 否 然り（誰から？）

自分で工夫したのか？ 否 然り（如何にして？）

C 自慰をどんな時、どんな方法で行うか

D 自慰継続期の永さと其度数？

暫時 ヶ月 約 年

約 年又は 月に 度

E 人から聞かされた自慰の害で、あなたが平生こはがつて居る事(即ち強迫観念)は何か

F 実際あなたの気分と健康の現状を振り返つて見た時、あなたは其等の強迫観念はどう考へるか。其他の所感

G 団体群居生活（例、兵役・寄宿舎・合宿所等）の経験があるか

あり なし

あつたらば、どんな団体の中に？

其団体生活があなたの性的生活に与へた影響

最初の性交

(5) 性交を行うた事があるか。 なし あり

A 経験をもたぬ人に対して……

あなたが経験をもたぬのは唯偶然にかやうな機会が来なかつた為か

然り 否

それ共、わざと其機会を逃れ避け、又は退けた為であるか。 然り 否

あなたが其機会を回避し、又は撃退したのは如何なる理由に基づくか

例へば次の理由の一、又は数多の組合せ、又は其他の理由によるのか

理由は何もない 唯いやだといふ感じ
宗教や倫理の上の信仰や思想
好き嫌ひや美醜などの美的判断と趣味
愛人に捧げる宝として自他の童貞純潔を尊重保護する心
衛生上から性的病症の方の心配
経済上思ふやうに行くまいといふ圧迫 (例へば子を養へる見込も無いのに妊娠が起つたらとか、家庭生活を作るのはまだ早いとか面倒だとか)

其他

B 経験のある人に対して……

最初の性交の時の年齢 満 年 ヶ月

又は数へ年の 年の春 夏 秋 冬

其時あなたの立場は? 能動 中立 受動

其時の特別な事情 (例へばアルコール性飲料の使用とか、群集心理の作用とか)

相手の年齢はあなたより? 年上 同年 年下又は不明

其人の社会的位置と職業。 未婚 既婚

最初の性交の後、性的実生活の変化?

其後の異性に対する考への変化?

問に接した時の感じと其他

(6) 此問を一応読んで、答を書いてやろうとか、えゝ失敬な、屑籠へ葬つてやれとか、書きたいが一々面倒だとか、夫々色々な心持と其感じが起るわけ

当然 不快 (無礼と感じ) 憤慨 うるさい

個人の秘密暴露を恐れ尻込みする。 其他

其理由

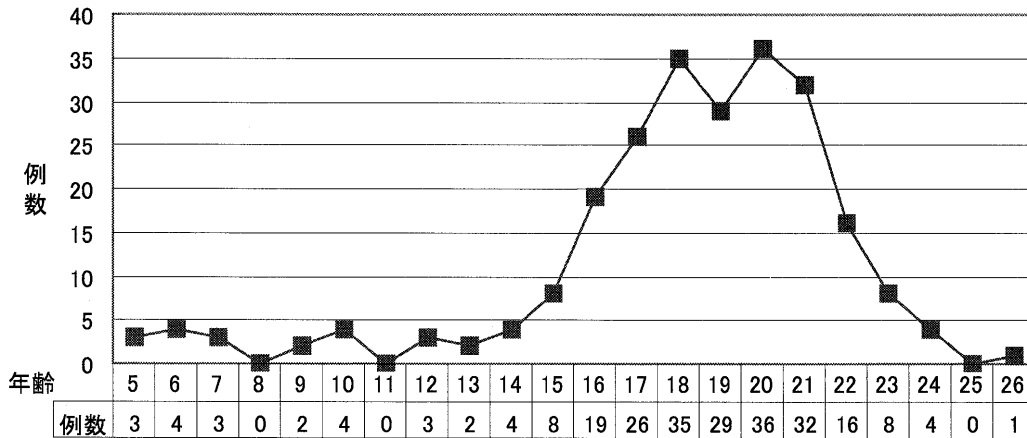
(7) あなたは子供の時どういふ風に自分が此世にうまれてきたと人から話され、又自分で信じて居たか

例 木の股からきたとか、鶴にくはへられて何処からきたとか、母の腹が桃太郎の桃のやうに割れてそこから出たとか

出典:「性教育」(『山本宣治全集 第二巻 性教育』汐文社、1979年、326-332頁)より抜粋。原文は縦書き。

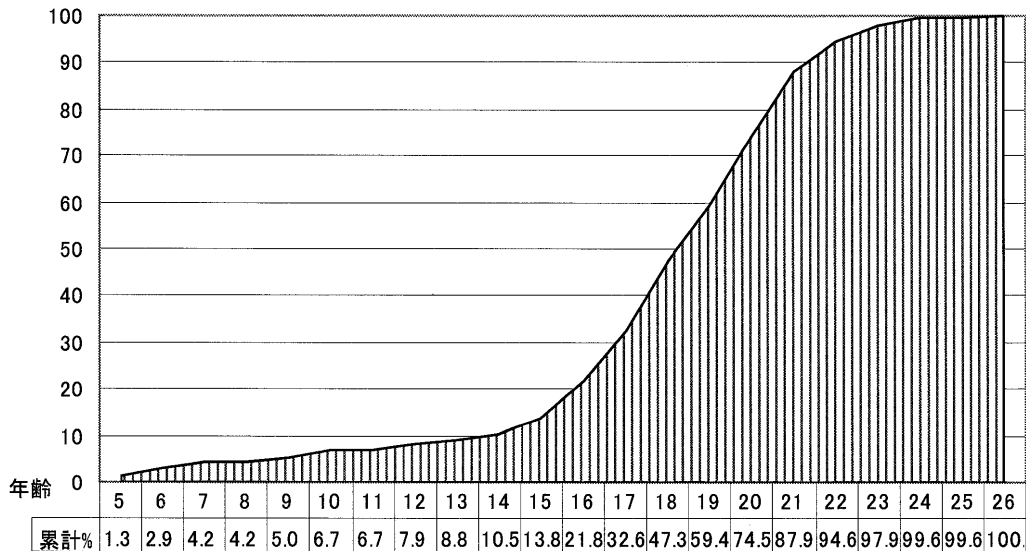
資料Ⅱ-1 性交初発者数(総数 516 うち経験者 240)

	早稲田大学	東京帝国大学	同志社大学予科	合計
経験あり	95	67	78	240
経験なし	74	73	129	276
合計	169	140	207	516



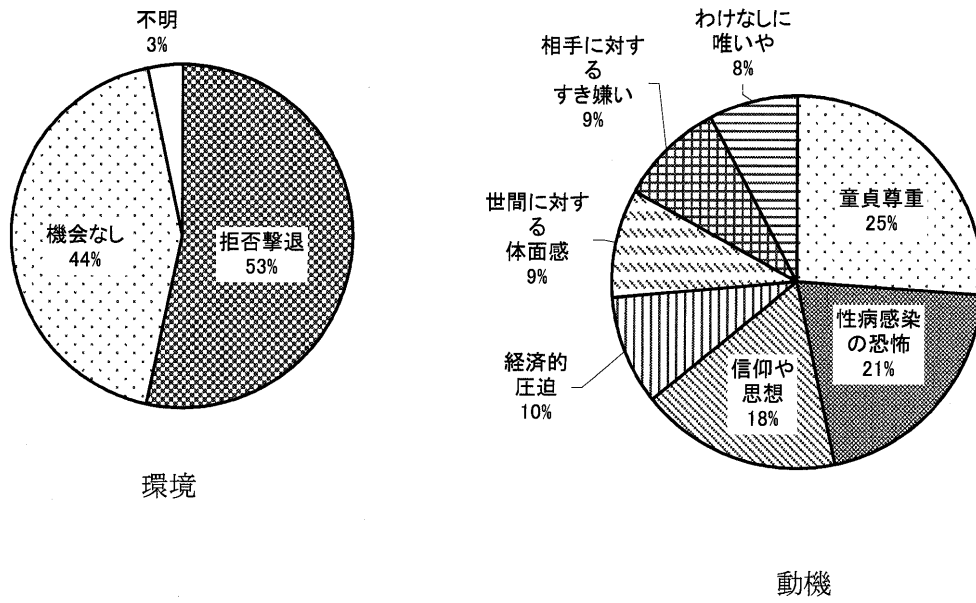
出典：山本原図(1924年10月)、「現代の両性問題」第十四図(『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979年、370頁)に基づき筆者作成。

資料Ⅱ-2 性交経験者数増加表



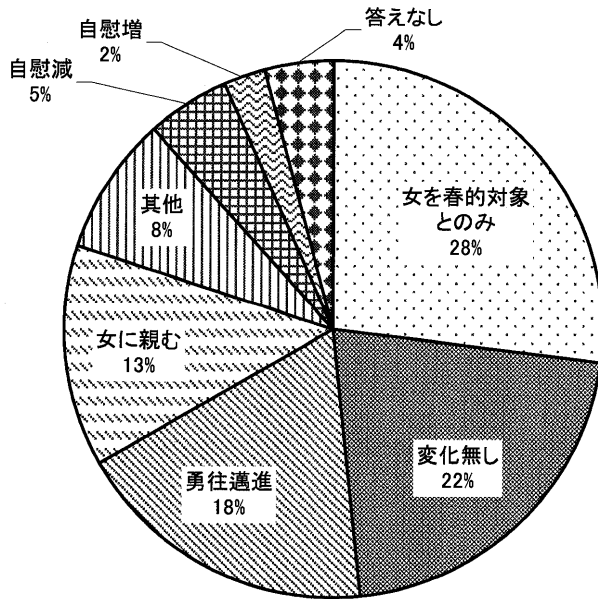
出典：山本原図(1924年10月)、「現代の両性問題」第十三図(『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』汐文社、1979年、369頁)に基づき筆者作成。

資料Ⅲ-1 童貞維持の環境及び動機(総数 516 うち性交未経験者 276 名対象)



出典:山本原図(1924年10月)、「現代の両性問題」第八図(『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』
 汐文社、1979年、352頁)に基づき筆者作成。

資料Ⅲ-2 性交経験後女性に対する意識の変化



出典:山本原図(1924年10月)「現代の両性問題」第十八図(『山本宣治全集 第一巻 人生生物学・性科学』
 汐文社、1979年、373頁)に基づき筆者作成。

Role of Human Sexuality Research in Senji Yamamoto's Theories of Human Sexuality Education in the 1920's

Emi Shibamoto*

Summary

The relationship between Lectures on the “Biology of Human Life” and human sexuality research by Senji Yamamoto (1889-1929), a representative authority on sexology in Japan during the 1920's, was examined. In his theory of sexual education, Yamamoto pointed out the need for scientific knowledge of human sexuality based on research on human sexuality by him and his cousin, Tokutaro Yasuda (1898-1983) who had initiated to understand the reactions to the Lectures on the “Biology of Human Life.” Then they tried to redevelop the scientific knowledge of human sexuality and to communicate this knowledge through different means, including the Lectures on the “Biology of Human Life.”

Keywords : Senji Yamamoto, sexuality education, human sexual life research

*Osaka College of Social Health and Welfare
〒590-0014 8-2 Tadei-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Care and Welfare
e-mail: e.shibamoto@kenko-fukushi.ac.jp